

環境問題バザールの構想

授業改善の方向性

- (1) 環境問題を取り上げ、調べ学習を進めるには、資料が必要である。そこで、約1か月間にわたり、資料収集期間を設ける。
- (2) 調べ学習の時間とともに、収集した資料をじっくりと読む時間を確保する。
- (3) 自分の主張を明確にするために、「第一次意見文」を書く場を設定する。
- (4) 環境問題は広範囲にわたるため、あれもこれもと手を広げずに、調べたことをもとに、伝えることを一つに絞り込ませる。
- (5) コピーペイストを防ぐために、調べた結果を壁新聞などにまとめ直すことはしない。新聞の切り抜きなどの手持ちの資料をそのまま提示しながら説明させる。そうすることで時間の節約にもなる。
- (6) 環境問題は専門的なため、聞き手は何もわからない存在であるという相手意識を強くもたせる。
- (7) 自分で調べて自分なりに理解したことを自分の言葉で説明させるために、発表原稿は作らせない。メモ程度のものを見ながら、あるいは慣れてきたらそれも見ないで発表させる。そうすることで、専門的な用語をそのまま使うことを防ぎ、聞き手にとってわかりやすい発表となる。
- (8) 意欲の低い生徒でも個別の学習活動が主体的かつ円滑に進められるように、学習の流れを明確にしておく。
- (9) 個人学習が中心になるため、生徒と1対1の対話の時間を設定し、生徒の気持ちにできるだけアプローチするようにする。
- (10) 調べたことをまとめない、発表原稿を作らないなど、生徒を追い込むことによって、今までは原稿に頼っていた発表から脱却させる。そして、学習の達成感をもたせる。

「環境問題バザール」学習のねらい

- (1) クラスすべての生徒にとって、「話すこと・聞くこと」の学習活動ができるような場を設定する。
- (2) 自分が集めた資料から興味をもったことを取り上げることにより、学習への意欲付けを図る。
- (3) 一人一人の生徒に学習した結果の達成感や成就感を味わわせる。
- (4) 様々な資料を読み、環境問題について考え、自分の考えをもたせる。
- (5) 目的をもって資料を読み、必要な情報を集め、自分の表現に役立たせる。
- (6) 環境問題に限らず社会の動きなどに関心をもたせる。
- (7) 繰り返し話す活動を行う中で、説得力のある話し方、わかりやすい説明の仕方を身に付けさせる。
- (8) 自分の考えや気持ちを相手に理解してもらえるように話したり、話し手の意図を考えながら話の内容を聞き取ったりさせる。
- (9) 自分の考えや気持ちを的確に話すためにふさわしい話題を選び出させる。